

計 | 雨 | 晴



に行く。

料理はう

まい。その証拠に新潟を代表する料亭のだんなもよく夕食がてら来ています。カウンターの

食がてら来ています。カウンターの

い飲み仲間のうわさ話(悪口?)か昔話をしながら飲む。それにしてもこの連中は相当口が悪い。黙っていると損なので、私よりかなり年配の人たちばかりではあるが、負けじとこちらもやる。人見知りのきつい私もすぐに仲間に入れてもらった。

この店の常連客は、この店の

ある事務所の話

単身赴任の私が、夕食がてら飲みに行く店がある。六十歳過ぎ(一見見えない)のおかみさん一人でやっている八人も入ればいっぱいになる小さな店である。座ると目の前に「夜逃間近」の木札が掛かっている。サービスは恐ろしく悪い。のれんをくぐっても「いらっしやいませ」でもないし、座っても「何にしますか」でもない。当方から頼まない限り何も出てこない。にもかかわらず、気に入って飲み

外、しかもわがおふくろの味とそっくりときている。何よりもおかみさんの気づぶがよい。愛想の悪さを差し引いてもお釣りがくる(それに色気もまだある)。店で名刺交換したり、仕事の話をするといやな顔をす

ことを「事務所」と呼ぶ。例えば昼間会つと「今夜、事務所へ行くかね」という風に…。そこで思った。ここは皆にとってコミュニティセンターなのではないかと…。ここに来れば飲み仲間に見えるし、その日会えなくてもおかみさんを通じて消息

平山 郁夫 (日本銀行 新潟支店長)

が分かる。そう、ここは老人クラブ(失礼)の事務所なのだ。だから、肩書で飲むやつは一人もない。そう気が付いた途端とてもうらやましく思った。事務所と呼ぶ飲み屋を持てる地方の生活の豊かさをつくづく感じたからである。東京が無くした大切な何かがこの店には残っているのである。

今夜も店には、入れ歯を飲み込んだと勘違いして入院したS氏など、エピソードには事欠かっていることだろう。さあ、私もこんな文章を書いた謝りがてら事務所へ行くとするか…。

この秋に事務所は開設三十五周年を迎える。

「晴雨計・その後」⑤

「ある事務所の話」

平山征夫

この事務所はもうない。陽気だった事務所の常連客達も殆どあの世に旅立った。この事務所には「文士劇」風に新潟の財界人を「忠臣蔵」の芝居にキャスティングした極秘のノートがあった。時折、それを取り出して不在者を肴に配役変更を議論するのだが、それは一番事務所が盛り上がる話題であった。かつて私も「大石力役を！」と要求したこともあった。しかし女将と雲助役のタクシー会社社長を残して、大石内蔵助も力も吉良

上野介も堀部安兵衛もやり手婆も花魁役も皆逝った。幸い女将は確かもう米寿だが新潟市内のケアハウスで元気にしている。いつか、あの「夜逃よにげ間近まぢか」の木の裏に、こっそり「あの世間近まぢか」といたずら書きしたが、現実がそれを追い越してしまった。私が知事をやっていた頃は女将も頑張っていた。知事選挙の際など私のポスターを外から見るとところに貼って「選挙違反になりますので見えない処に移してください」と警察に言われても「ポスターというのは見えるところに張るもんだ」と元氣一杯だったが、その後、客が一人欠け二人欠けするうちに、女将の方も体調を崩して大学病

院に入院しがちとなり、店は開けたり閉じたりを繰り返すようになった。退院したと聞いて出かける、「いやあ、主治医が若くてハンサムなんで、出てきたくなくて……」などと強がりやを言っていたが、道路拡張で小さな飲み屋が半分引つかかるとなると、店仕舞いの覚悟を決めた。事務所を失った常連老人たちは哀れだった。新たな事務所を求めて右往左往、なかなか良い店が見つからず、ぼやきながら情報交換しあう日々が続いた。そのうち、それぞれ何とか落ち着き先を見つけたが、それは単なる行き付けの飲み屋で「事務所」ではなかった。私も同様だったが、知事のためやたらと飲み

出歩けないのでその悲哀は比較的少なかった。新潟一の料亭の娘として生まれながら、同業者の保証に引っかけり没落、気の毒に思った財界人たちが応援してこの飲み屋を開かせたという。その中心だった傑物和田閑吉（商工会議所会頭）は「困ったら俺の女だと言え」と保証？したそう。忘れられない記憶がある。雨の夜、他に客はいなかった。女将は酔っていた。遠くを見つめるような表情でぼつんと言った。「あの日、好きだった人の出征を見送りに広島まで行ったんだよなあ」。「事務所」にも昭和の歴史がひとつあった。

